

西俊輔の「毎日楽しく」

Vo 1.8 2006年4月号

最近読んだ本の中で印象に残った1冊をご紹介します。藤原正彦氏の「国家の品格」という本です。ベストセラーになった本ですので、読まれた方も多いでしょう。

本ではときどき過激な表現が出てくるのですが、そのひとつで、全国の九割以上の小学校で英語を教えている現状について、「小学校から英語を教えることは、日本を滅ぼす最も確実な方法」と言っています。英語ができるに越したことはないのですが、英語はあくまで話すための手段であって、重要なのは話す中身だといいます。実際、外国の方と話しをしても、他国の歴史やシェークスピアのことを日本人に聞いてくる人はいなくて、やはり日本の文化や歴史を聞いてくる方が多いそうです。こうしたことに答えられるためには日本の文学や歴史を身につけている必要があって、初等教育で英語にいいやす時間は少ないといいます。

また、筆者は欧米的な「論理」だけでは人間社会の問題は解決できないとも言っています。そのひとつの例として以前話題になった「なぜ人を殺してはいけないか」ということをあげています。筆者によれば、人を殺してはいけない理由と同じぐらい人を殺してもいい理由をあげられるといいます。したがってこうした問題を論理で解決するのは不可能であって、人を殺してはいけないのは「駄目だから駄目」で、理由なんか無いというのです(ダメだったらダメというのは私も好きです)。おもしろいのはこの筆者が数学者で、論理の世界に生きている人だという点です。

本でも書かれているように、最近の日本では論理や合理性、特に経済合理性が重視されて、情緒や美的感受性、武士道精神にみられる慈愛、誠実、忍耐、正義、勇気、名誉、恥といった感覚が軽視されているように思います。日本が世界から尊敬されるためには、欧米のあとを追いかけるのではなく、こうした感覚や人間性を磨くことが重要なかもしれません。

昭和の初めに駐日大使を務めたフランス人のポール・クローデルは、「日本人は貧しい。しかし高貴だ。世界でただ一つ、どうしても生き残って欲しい民族をあげるとしたら、それは日本人だ」と言ったそうです。今の日本人を見ても同じことを言ってくれるのでしょうか・・・。

